

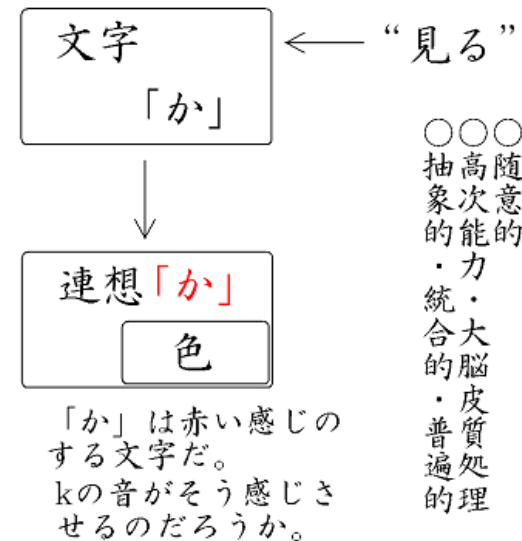
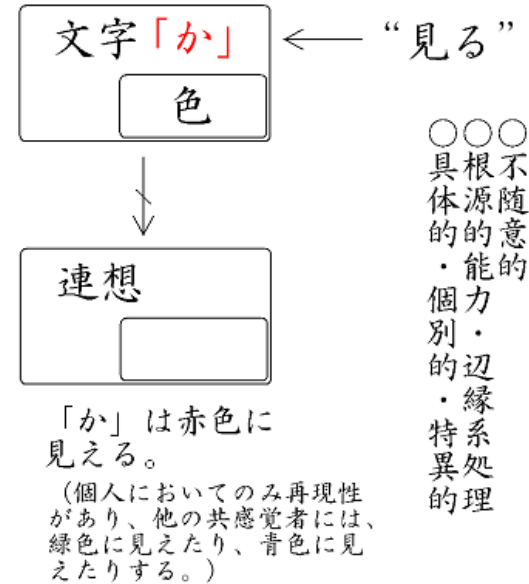
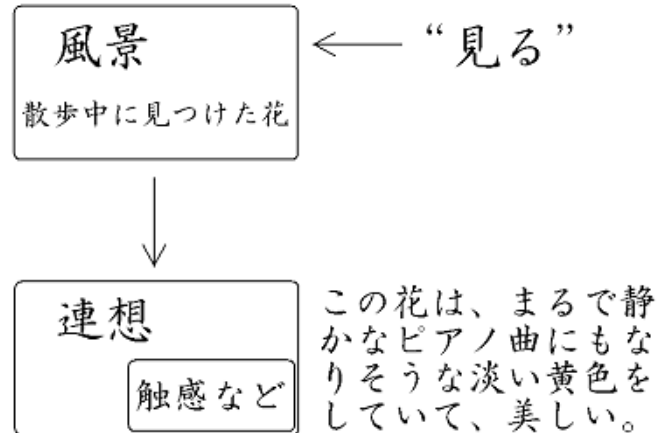
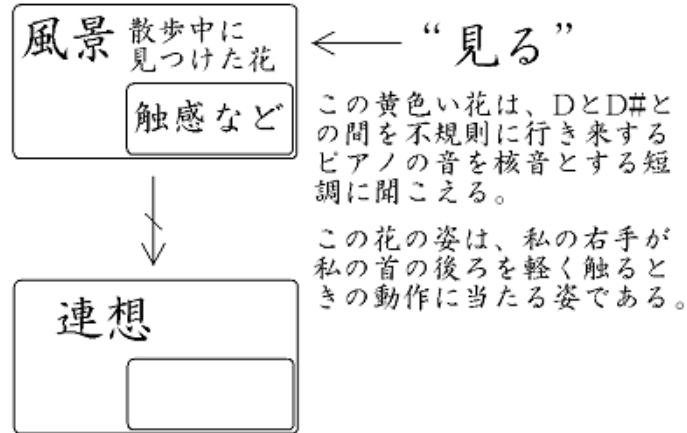
岩崎純一が語る 人間の原初的身体、精神、言語

斎の巫女、アイヌ女性、琉球女性、
精神障害女性の、
そして自らの五感世界をめぐる
岩崎人間学の旅

岩崎純一

女性専用施設における講義・講話・授業用資料

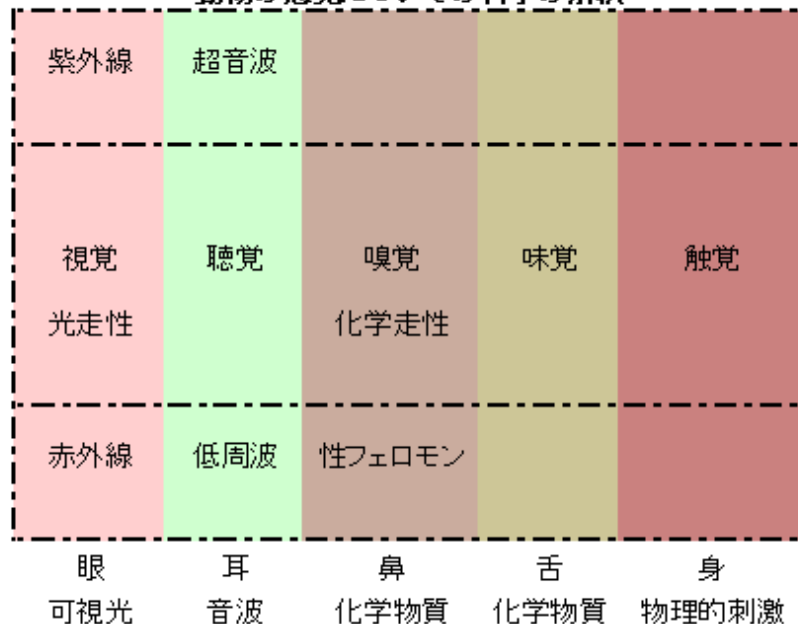
共感覚とは何か



共感覚

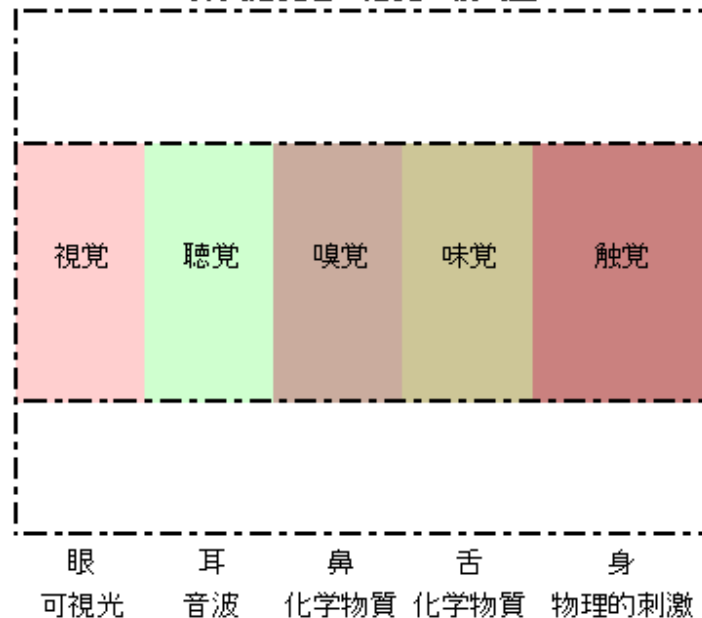
連想・比喩・共通感覚・
異種感覚連合・想像など

動物の感覚についての科学の解釈

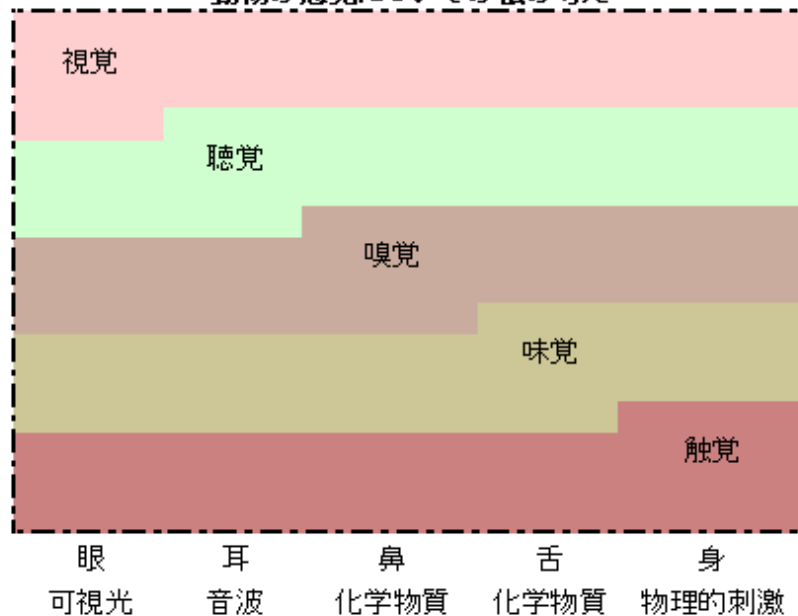


非共感覚者の感覚の模式図

生じる感覚



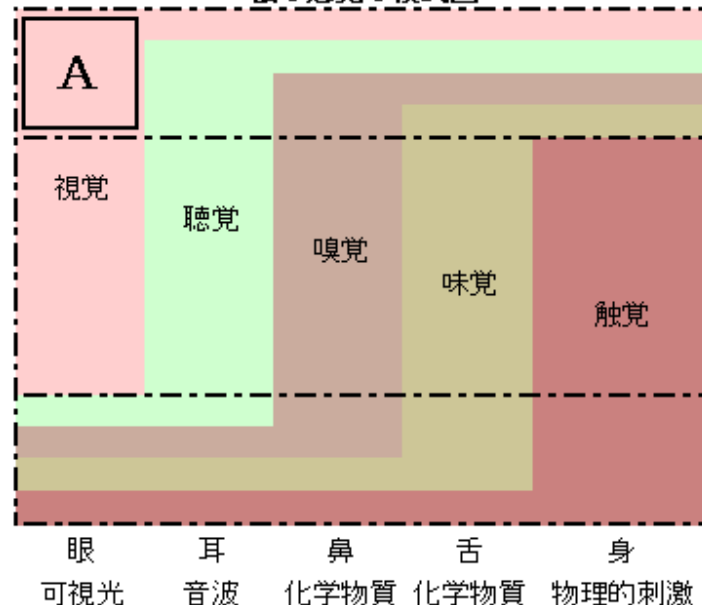
動物の感覚についての私の考え



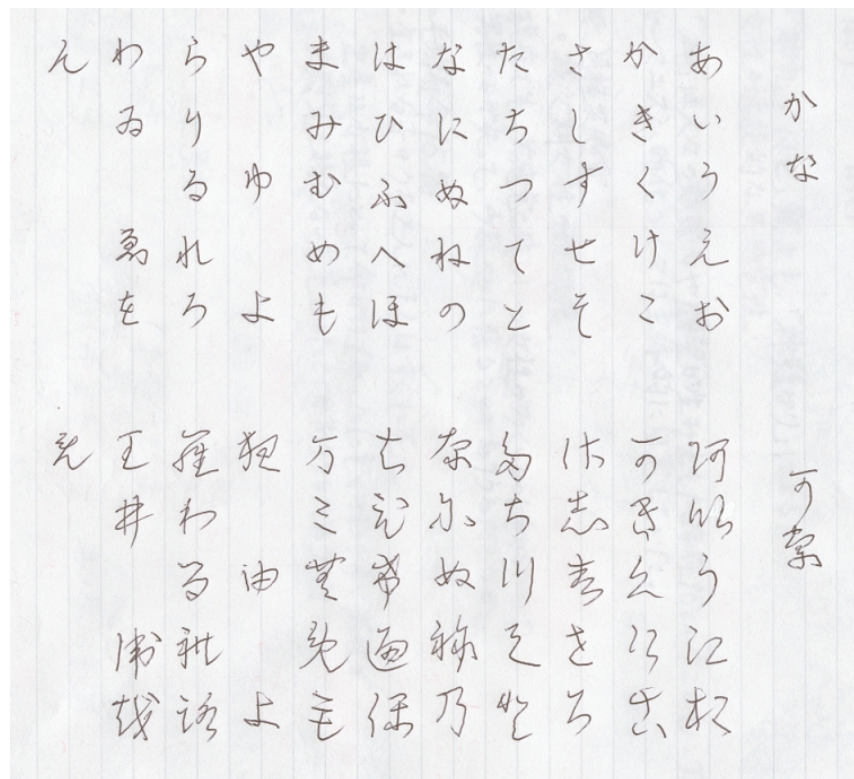
私の感覚の模式図

生じる感覚

主な感覚器官
主な感覚対象



ひらがな・カタカナ



ん わ り や ま は な た さ か あ
 ゐ り ゅ ゐ ゐ に ち し き い
 ゑ れ ゑ ゑ ゑ ね て せ け え
 を ろ よ も ほ の と そ こ お

ン ワ ラ ヤ マ ハ ナ タ サ カ ア
 ン リ ム ヒ フ ヌ ツ ス ク イ
 エ レ メ ヘ ネ テ セ ケ エ
 ヲ ロ ヨ モ ホ ノ ト ソ コ オ

漢字

優憂欲谷
偽為歐區
借昔欠
信言闇音
体本閤伐
付寸閣各
人門

水無月 六月	皁月 五月	卯月 四月	弥生 三月	如月 二月	睦月 一月
夏至 芒種	小滿 立夏	穀雨 清明	春分 啓蟄	雨水 立春	大寒 小寒
師走 十二月	霜月 十一月	神無月 十月	長月 九月	葉月 八月	文月 七月
冬至 大雪	小雪 立冬	霜降 寒露	秋分 白露	処暑 立秋	大暑 小暑

立日心
立日心
音心
音心
意

黒灰紫青紺緑
黄橙茶赤桃白

窓越しに月おし照りて
あしひきの
嵐吹く夜は君をいとおもふ



浮世の闇を
照らしてぞゆく

楷書で書くと色はどのように
変化するだろうか。

行書のまろみと色はどのように
変化するだろうか。

草書で書くと色はどのように
変化するだろうか。

書



逢はむ日の形見にせよと手弱女の
 思ひ乱れて縫へる衣を
 遠き方へ飛見せよと手弱女
 思ひ乱れて縫へる衣を
 桜花咲きかも散ると
 見るまでに
 誰かも此処に見えて散り行く
 うつつには逢ふよしもある
 夢にだに
 間なく見えぬ
 恋に死ぬや

逢はむ日の形見にせよと手弱女の
 思ひ乱れて縫へる衣を
 遠き方へ飛見せよと手弱女
 思ひ乱れて縫へる衣を
 桜花咲きかも散ると
 見るまでに
 誰かも此処に見えて散り行く
 うつつには逢ふよしもある
 夢にだに
 間なく見えぬ
 恋に死ぬや

余はぬけの雲しく月けり
 川の中を流るる水

余はぬけの雲しく月けり
 川の中を流るる水

余はぬけの雲しく月けり
 川の中を流るる水

余はぬけの雲しく月けり
 川の中を流るる水

書

共感覺繪画



臚親詭中形形彩密広教趣
 臚親枕形待悲枕草五孤悲
 臚語姑待待悲待教五閨悲
 親道悲待悲悲悲家其願癸
 造朝待悲悲原考美草親教
 造密贈悲原原考語建臚強
 林素道癸癸房枕素語臚広
 強家者新親親欲身落落朝
 美則寒形形甲形彩落語落
 即其寒癸悲房悲悲悲形落
 森建枕悲待房努姊悲間語
 密草枕悲待悲姊妨悲枕晚
 造語反悲原待妨待待枕願
 臚親反癸原待魂魂考考親
 新森草癸悲原贈考教慕建
 臚森臚密教教道五密密臚
 臚臚臚臚親新親臚臚臚臚

—紫陽花—

2007.7.22

アルファベット・数字・音階

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
0123456789

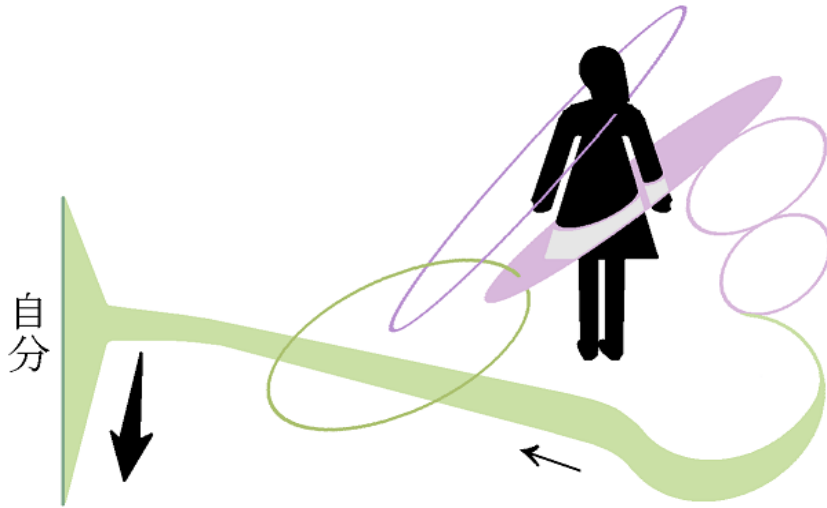
1234567890



ミラータッチ共感覚 (mirror-touch synesthesia)

- 他人の身体を借りて第三者に触れることができる。
- 他人が触れられているのを見て自分が触れられたと感じる。
- 相手を目視するのみでその人に対して触覚が生じる。
- 他人の痛み(比喩的な意味ではない)を自分の本当の痛みと知覚する。
- 物体・人間・動植物・自然物のいずれに対しても起こるが、おそらくは異性に対するミラータッチ共感覚が多いと考えられる。
(特に男性の場合、女性に対してのみ起こるケースが多い。)
- 対象が人間の場合、ミラータッチ共感覚が起こる身体部位が相手の身体部位とほぼ一致。(手＝手、背中＝背中)

対女性共感覚(女性に向かう共感覚の総称: 岩崎純一)

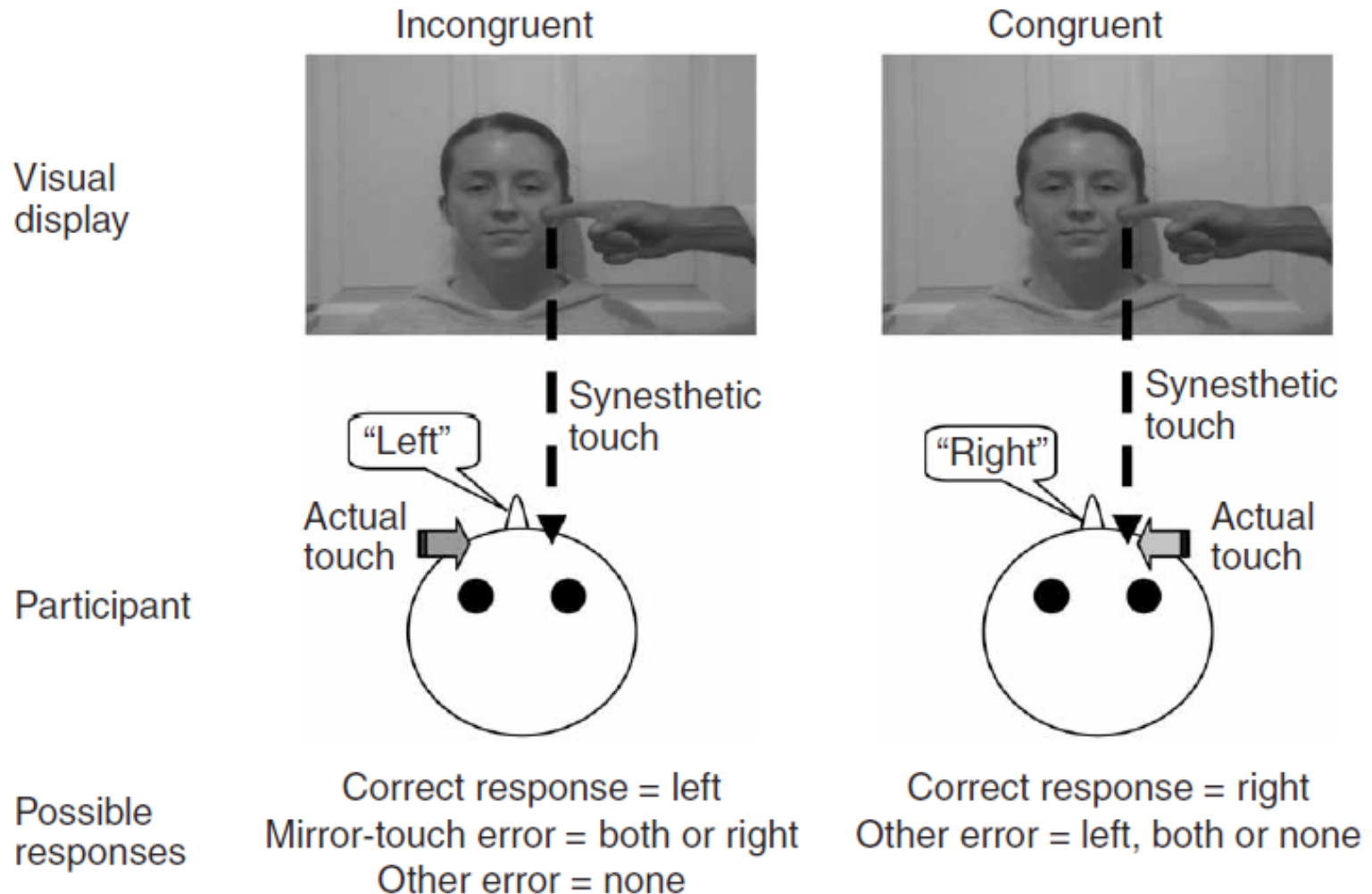


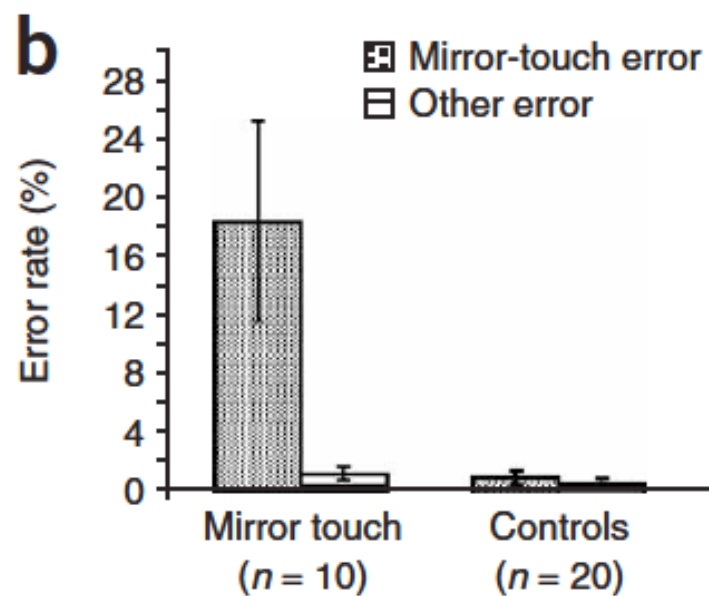
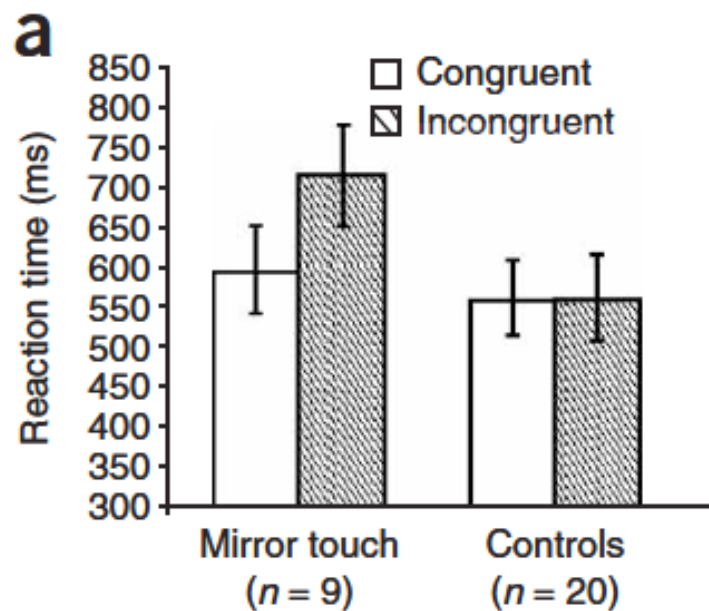
- 約28日周期で色や音付きの一定の波を描く。
- 一週間で、周りの初潮後・閉経前女性人口の約10%(特に20代)
- 一か月で約30~40%
- 三か月で約60~70%?
- 倫理的観点から、漢字(数千字)のように進まないが、どのような女性に見えやすいかを記録中。

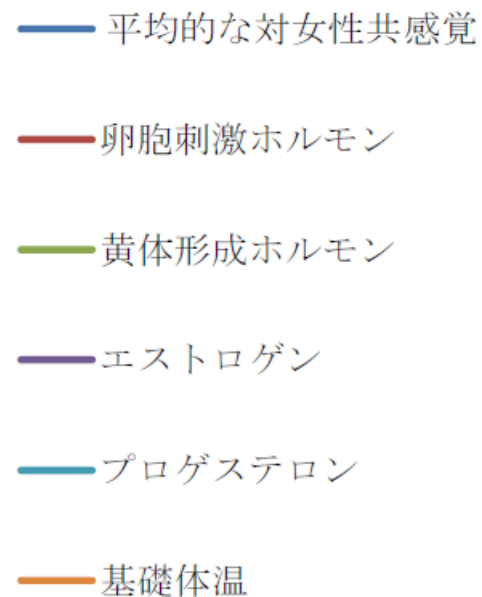
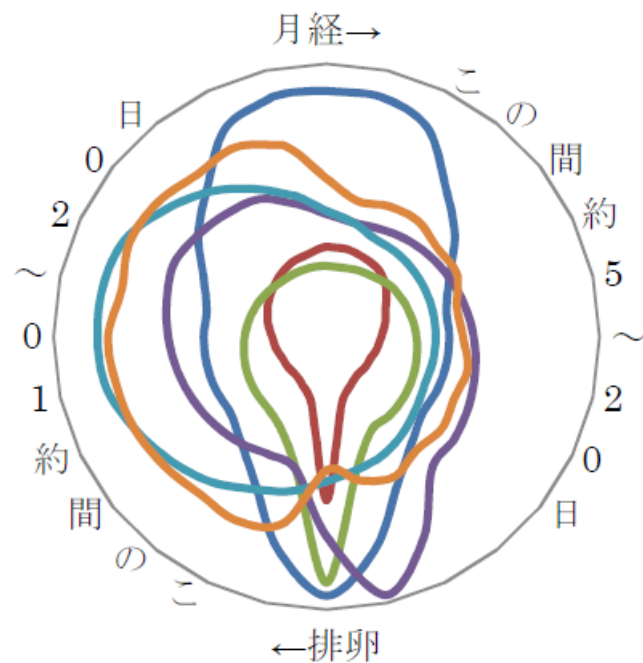
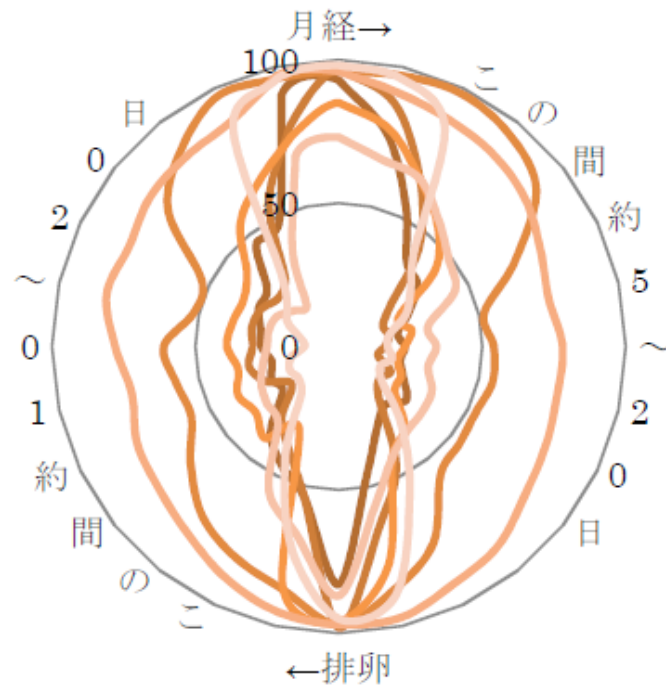
- ◎衣服着用の女性の排卵・月経を色や音で感知できる。Aさんの排卵は紅梅色の口短調、Bさんの月経は浅葱色の律音階。(海外の男性でも確認)
- ◎女性を目視しただけで触れることができる。
(対女性ミラータッチ共感覚。私以外の日本人男性でも数人確認)
- ◎妊婦のそばを通ると、一緒に「つわる」ことがある。
(対女性身体内ミラータッチ共感覚)
- ×胎児の性別を色で把握できる。
(多くの男児・女児で確認。母親からの報告。)

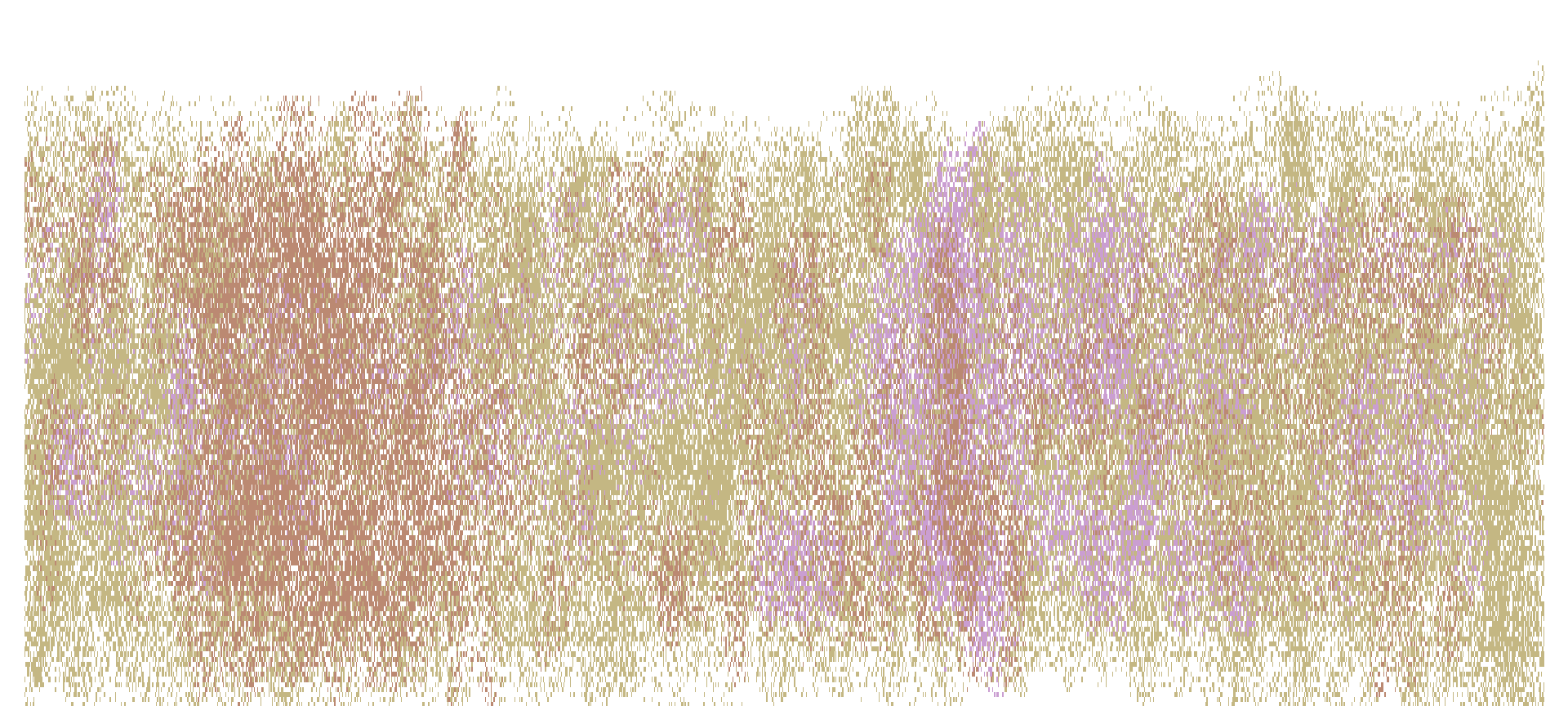
対女性共感覚は、「男性の生理(月経)」?
(性同一性障害・同性愛の問題については、後述)

本当にそのような共感覚があるのか？ →2007年に検証された
（“Mirror-touch synesthesia is linked with empathy”
Department of Psychology, University College London,
Michael J Banissy & Jamie Ward）









→ t | → 月経 → | 排卵 ↑

「排卵・月経感知能力は全て共感覚である。」(五感の強化では得られない。)

「対女性共感覚の体験には、全ての文字・形状・音への共感覚の保持が前提」
＝究極の「形」、自然風景の極致として女性を見ている状態。

メスの生理現象を知る能力は「障害」だろうか。

→共感覚が「障害」でないことを示す突破口。

→共感覚遺伝子がX染色体上にあるとの説を問い直す突破口。(Y染色体)

- ボノボ・チンパンジー・ヒヒ・アカゲザルなどは、排卵直前に尻・顔が紅潮して受胎可能であることをオスに知らせる。
- チーターのオスは繁殖行為を行う数日前に特殊な鳴き声を発し、これによりメスのエストロゲンとプロゲステロン量が増加して、排卵する。

オスの鳴き声を録音してメスに聴かせたところ、排卵した。

(サンディエゴ野生動物公園の生物音響学・生態学者の研究チーム)

→ ヒト以外の動物では、オスがメスの体をコントロールするか、メスの体の情報を把握していると考えられる。(オスの性的能力が種の存続に直結)

- 性的能力の欠如を科学技術と膨大な個体数で補填しているのはヒトだけ。

→ 対女性共感覚は、女性の排卵をどうしても感知しなければならない状況(「自らの死の直前」や「種の存続の危機」や「極度の過疎化」)に追い込まれたときには、今でも男性に蘇る共感覚と言えるのだろうか。

- 現代の男性が女性の生理現象を知ることは、「言語活動」そのもの。

* 基礎体温を計る。「体温(body temperature)」という抽象概念として把握。

* ホルモンの量を計る。「化学物質(chemical substance)」という抽象概念として把握。

女性 → 言語・科学技術 → 男性

●対女性共感覚の特徴

女性の厚化粧・香水・タトゥー・ピアスなどによって阻害される。(＝身体そのものを改変されるか、身体に過剰に他物質を上乗せされると、排卵・月経感知ができにくくなる。)

縄文・弥生時代の刺青・ピアスの風習、白粉などの厚化粧(月経中女性の隔離)

＝女性が意中にない男性の対女性共感覚から身を守る(男性が月経の苦痛やつわりの伝染を防ぐ)行為で、ファッション・アクセサリではないのではないか。

呪術的行為、身分・職能を示す、などの説が一般的

→共感覚からすれば、呪術というよりは実際の防御(女性の実益)になっている。

現代の化粧・タトゥー・ピアス

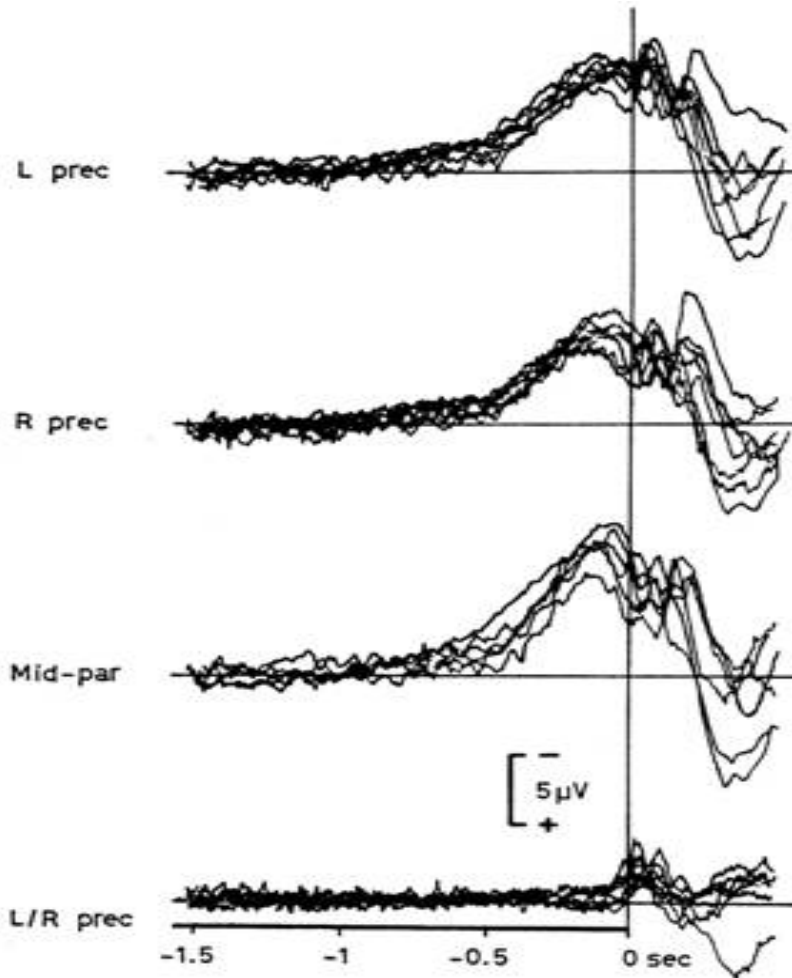
＝ファッション・アクセサリ。それらを施さないことによって生じる性的実害がない。(動物的な防衛本能として化粧や身体改造を行っているわけではない。)

- 日常的に対女性共感覚を有していることは、他の動物のオスや戦争中の兵士と同じ緊張状態に日常的に生きていることを意味するのだろうか。

“平坦な(フラットな)オス”(岩崎純一)

●自由意志 排卵・月経の感知は、意志か非意志かを答えられない自然現象であるとの実感がある。文字や音の色は、多少意志か非意志かを明確にできる。

(『共感覚者の驚くべき日常』 シトーウィック、草思社、2002)



- 被験者に好きなときに手を動かしてもらった結果、「手を動かそう」と意志した時点のおよそ0.3～0.5秒以上も前から「手を動かす」活動電位が発生していることを発見した。(ベンジャミン・リベット)
- 動かす手を被験者に自由に選んでもらうと、右利きの人はいたいい6:4の割合で右手のほうを多く動かす。
ところが、左手をつかさどる右脳を刺激しながら同じ実験を行うと、2:8の割合で左手を多く選択し、しかも被験者は自由意志によって左手を選択している(ように自覚される)ことを発見した。(パスカル・レオーネ)

- どんなに今初めて自分の意志で瞬間的に意図したと思う行為でも、それ以前から潜在的に意図されている。(＝行為を意図する主体は、近現代の我々が「自我」「自己」と呼んでいるものではない。あるいは、主体はない。)

- この検証が正しいとしたときの、対女性共感覚の言い回し

「女性の排卵を知りたいと意図した私自身を意識するよりも少し前に、私はすでにその女性の排卵を感知している。」

「私はあと0点数秒後に、その女性の月経を共感覚によって感知することを意図するだろう。」

「私が女性の排卵を知るのは、私が今より少しのちにそれを意図することによってである。ところで私は、その女性が排卵したことをすでに知っている。」

→対女性共感覚の実感に極めて忠実な日本語

(禪問答に類似)「公案」＝看話禪(臨濟禪)←→默照禪(曹洞禪)

- チーターのオスの排卵コントロール能力が、意志か非意志かを問うことはおそらくできない。この問い方自体が人間に(男性に)特有の問い方であり、自然界に与えている解釈である可能性。

●「人を思いやる」「人を愛する」「人の気持ちが分かる」とはどういうことか
＝究極的には、相手になりきること、同化すること、相手の自我と自分の自我との境界がなくなること。「自我＝無我・真我」

「あなたとは私である」「私とはあなたである」

「対女性共感覚」の名は「対人恐怖症」などに倣って付けたが、本当は「親女性共感覚」「融女性共感覚」と名付けたいもの。



「あなたは私ではない」「私はあなたではない」

＝西洋社会、近現代日本社会の基盤(教育、政治、経済、戦争、恋愛)

「自我が対他的に意識されること」「相手の心が完全には分からないこと」

＝「文明・言語の成立」「近代的恋愛(love)の成立」

- 仏教(中観、唯識、禅・・・)
- 歌舞伎の女形、土俵の女人禁制、月経中の鳥居回避
- 日本語の「逢ふ」(異性と顔を合わせる＝生殖行為。性欲と恋愛の区別なし)
- アメリカ・インディアン(ヤナ族:絶滅)男性の月経中女性からの逃避

- 和歌の代理詠(男性が女性の心で詠む)

女性を解釈するのではなく、いわば女性に“なりきる”こと。特に「女性の悲恋」を詠めること。女性にも詠めないと女性に思わせるような歌であること。

「幽玄」「有心」「余情妖艶(よせいようえん)」「縹渺美(ひょうびょうび)」

＝西洋で共感覚が話題になった世紀末～20世紀(象徴主義文学・絵画・音楽)

「白妙の袖の別れに露落ちて身に染む色の秋風ぞ吹く」(藤原定家)

「消えわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露」(同上)

「ありし夜の袖の移り香消え果ててまた逢ふまでの形見だになし」(九条良経)

「逢ふと見てことぞともなく明けぬなりはかなの夢の忘れがたみや」(藤原家隆)

「逢ふことは遠山鳥の狩衣着ては甲斐なき音をのみぞ鳴く」(元良親王)

(岩崎純一・・・恋歌七百首中、五百首が代理詠)

「衿の色袖のにほひも身をかけて霜の日数に朽ちし雛形」

「我が袂夕日隠れのよしもなし落ゆるもみぢの彩の涙に」

「今はかく過ぎし橘したふとも残る褥に直香をぞ聞く」

「はかなしなひとりかきやる手末は重ねてかかる紙遣ひして」

「逢ふことは硯のかたき闇の色思ふ心を摩るとばかりに」

●「男・女」という対立はどこまで遡れるか。

「善・悪」「真・偽」「美・非美」「意志・非意志」などは、我々ヒトが言語を持って以降に生じた概念。一方、「男・女」「オス・メス」なる性別の認識は無言語的。今の我々が言語を失ったとしても、失われない世界。昆虫や植物にもある。

ボノボの同性愛・・・人間の同性の友人どうしが肩を叩いたり抱き合ったりするのと同じ「挨拶」を全てカウントしている可能性があり、我々が一般に言う近代的「同性愛」とは異なる。(性同一性障害は別にして。)

対女性共感覚を共有する男性どうしの友情・信頼＝古代の同性愛・男色の形？

●共感覚は「個性」と言えるか。

「個性」とは何か＝自我と他我の区別によって成立したもの。

野球好きがいればサッカー好きもあり、画家がいれば彫刻家もいる。＝個性

対女性共感覚を持つ男性もいれば、そうでない男性もいる。＝？

生(性)の根源にかかわる「ミラータッチ共感覚・対女性共感覚」の存在

・・・「共感覚は個性である」と言うことがはばかられてしまう。

共感覚は、「同時代の個体差・多様性」ではなく、「人類の知覚の遡及状態」

対女性共感覚は、オスの「無個性の個性」、「無価値の価値」、「昔の男性」、「オスと男性の架け橋」

共感覚の文化・民族・言語依存性

- 私は髪を切った。
 - 私は車を修理した。
 - 彼は足を手術した。
 - がれきの下の人はまだ救える。
-
- 美容師は私の髪を切った。私は髪を切られた。
 - 修理士(私)は私の車を修理した。私は車を修理された。
私の車は修理された。
 - 医者は彼の足を手術した。彼は足を手術された。
 - レスキュー隊はがれきの下の人をまだ救える。
がれきの下の人はまだ救われることができる。
-
- 私は私の髪を切られた状態を持った。

I got my hair cut. (I had my hair cut.) = 過去分詞
(これは、二重の主述(SV)関係を持つ。)

- 「I cut my hair.」と言いながら、「cut」したのは「I」ではないという構文
日本語や世界の先住少数民族・非西洋先進諸国の言語には残っている。
西洋語では有史の早くから減少・消滅。（古代ギリシア語の中動態などに痕跡。）

- This book sells well.（中間構文）

- 再帰動詞

Ce ticket se vend 2 francs.

（このチケットはそれ自体を2フランで売っている。）

＝（このチケットは2フランで売られている。）

This book sells (itself) well. （結局は他動詞文そのもの。）

現代英語では、あらゆる行為・自然現象が「能動態か受動態」、「自動詞か他動詞」、「主体か客体」などの厳格な区別に組み込まれる。フランス語・スペイン語・ドイツ語などもこの文法に達している。

- この構文はどのような場合に後世まで残るか。
「無防備に他者に自分の身体を任せたり、自分の所有物（他者との共有物）を他者に扱わせたりしたとしても、結果として自分と他者の両者に精神的な満足感・達成感がもたらされる行為」に残る。
散髪・手術・所有物の修理・災害時の人命救助など。
- 「私（男性）は排卵した（月経を迎えた）。」と言いながら、そうなったのは「私」ではなく女性であるという構文
現代の一般男性は、「私は髪を切った。」を自然な日本語、「私は排卵した。」を不自然な日本語と認識。
- 「私（女性）は排卵（月経）を感知した。」と言いながら、感知したのは男性でも女性の「私」自身でもあるという構文（排卵痛・月経痛）
- 「性の文法的不均衡」（岩崎純一）・・・女性が使っても矛盾しないのに、対女性共感覚を持つ男性以外の一般男性が使うと矛盾する文法が、同時代に存在する。完全に同じ文法で同時代の女性とコミュニケーションできるのは対女性共感覚を持つ男性で、他の一般男性ではない。女性と対女性共感覚者男性が使って矛盾しない文法は、英語などの西洋語では、時代が下るにつれて淘汰された。（該当の構文が十数個）

A 「私は髪を切った。」(切ったのは床屋)

①「床屋は髪を切った。」 ②「私は床屋に髪を切られた。」

③「床屋は髪を切ってくれた。」 ④「床屋に髪を切ってもらった。」

B 男性の視点 「私は排卵した。」(排卵したのは女性)

①「女性は排卵した。」 ②「私は女性に排卵された。」

③「女性は排卵してくれた。」 ④「女性に排卵してもらった。」

→私の対女性共感覚の実感に極めて忠実な日本語

C 女性の視点 「私は排卵を感知した。」(女性と対女性共感覚者男性)

①「男性は排卵を感知した。」 ②「私は男性に排卵を感知された。」

③「男性は排卵を感知してくれた。」 ④「男性に排卵を感知してもらった。」

「私は髪を切った」「私は排卵した」どちらも違和感がない。＝高校生の頃に自覚
「自分の対女性共感覚を表せるだけの力が英語にはない。日本語にはある。ただし、古代日本語・和歌のほうが表現しやすい。」

B・Cにおいても③「くれる構文」や④「もらう構文」のような心を持てるかどうか。

男性が女性の生理現象を「我が身の事」として感じることができるかどうか。

なぜ西洋先進諸国語では、このような実感を描ける文法が早くから消えたか。(ゲルマン祖語、ラテン語以前、古代ギリシア語、印欧祖語)

＝この文法が存在しなくても生活できる知覚・思考に変化してきた。

(言語的相対論、サピア・ウォーフの仮説)

＝文法が知覚と乖離しているだけ。文法がどれほど合理化しても、人間に普遍的知覚は廃れない。

(もしそうなら、現代西洋の対女性共感覚者男性は言語生活自体が苦痛のはず)

日本語でも、こういった構文が数十年、数百年のうちに消滅する可能性あり。

→これが、共感覚がまず西洋史で取り上げられた理由そのもの。(前言語的・前西洋的な人類の知覚世界への憧れ。芸術至上主義・哲学)

→「対女性共感覚が、現代西洋白人の共感覚者男性よりも日本人や少数民族の男性の脳や体に実感のまま潜在的に残存している」ということはありうる。

「英語に訳せない日本語、日本人の共感覚、日本人の心はあるということを、正直に、隠さずに子どもに教えること」

「どうすれば音に色が見えるのですか？」

「どうすれば女性への共感覚能力が戻ってきますか？」

→「自分がヒトという動物種の一員であることを忘れずに、可能な限り知的に生きること」